

書評

山下克明著 『平安時代陰陽道史研究』

水野杏紀

四八

山下克明氏は陰陽道の研究者であり、これまでに陰陽道に關する多數の論文を發表している。また『平安時代の宗教文化と陰陽道』（岩田書院、一九九六年）、『陰陽道の發見』（NHKブックス、日本放送出版協會、二〇一〇年）などの著作があるが、本書は著者のこれまでの陰陽道研究の集大成といえるものである。

近年、陰陽道の關連史料は術數、道教、天文、曆術などに關連する記述や佚文他がみられることから、陰陽道以外の研究者からも注目を集めている。

そうした現況において、本書は陰陽道の定義から歴史

的變遷に至るまでを述べ、陰陽道と儒教・道教・密教との關連性、陰陽道史料全體の概要と紹介の他、陰陽道史料と朝鮮半島の史料との比較検討なども紹介するもので、陰陽道の隣接分野や關連研究においても有用な書となっている。

本書の構成は以下のようである。

序章 陰陽道の特質と關係典籍

第一部 陰陽道の成立とその展開

第一章 陰陽道の成立と儒教的理念の衰退

第二章 陰陽道の宗教的特質

第三章 陰陽道信仰の諸相——中世初期の貴族官

人・都市民・陰陽師——

第四章 密教修法と陰陽道

第五章 院政期の大将軍信仰と大将軍堂

第二部 安倍晴明と天文家安倍氏

第一章 安倍晴明の邸宅とその傳領

第二章 安倍晴明の「土御門の家」と晴明傳承

第三章 天文道と天文家安倍氏

第三部 陰陽道と文獻史料

第一章 陰陽道關連史料の傳存狀況

第二章 『承久三年具注曆』の考察

第三章 『大唐陰陽書』の考察——日本の傳本を中心として——

心として——

第四章 宣明曆について——『高麗史』曆志と日本の傳本——

の傳本——

附論 平安時代初期の政治課題と漢籍——三傳・三

史・『劉子』の利用——

以下、各部、各章の要點を簡潔に解説する。

序章「陰陽道の特質と關係典籍」。

著者が陰陽道に關して検討してきた問題點のうち、陰陽師の機能と宗教的性格について、關連典籍をもとにしながら、概括的にとりあげている。そのひとつである陰陽道とは何かという問題については、「災害や怪異・病をモノの警告・祟りと考え、占いと祭祀で對處すること」とし、ここに陰陽師、陰陽道の本質があるとしている。

第一部「陰陽道の成立とその展開」。

第一章「陰陽道の成立と儒教的理念の衰退」。

まず近年の研究動向を踏まえ、陰陽道という名稱は日本以外に通用していないことを述べ、陰陽道とは陰陽五行説・占術・曆・天文・道教信仰などの中國文化を主要な構成要素としながら、平安時代前・中期に獨自に成立したとする。

さらに陰陽道成立の基盤となったのは律令制下の官廳の陰陽寮であるとしており、陰陽寮官僚が職務とした占

術・曆、天文占などの未然の吉凶を豫測する術(術數と總稱される)をもとに、これを補充する不祥や凶兆を壊(はら)う呪術・祭祀を取り込んだ呪術的宗教となり、九世紀後半から一〇世紀にかけて成立したとしている。

さらに陰陽寮職務の宗教化が陰陽道成立の指標となり、九世紀後半からは五行家説の『董仲舒祭書』や道教經典などの傳來書を典據として祭祀活動が本格化したことを述べている。

また九世紀後半には、儒教的な合理主義の意義が衰退し、それと反比例するように、貴族社會に怪異への恐れが廣がり、陰陽寮官僚の活動が活發化したことを説く。

第二章「陰陽道の宗教的特質」。

九世紀後半から陰陽寮官人が呪術や祭祀活動を行い、ここに呪術的宗教としての陰陽道が成立したことを擧げる。占術を行使しながらも、日本の在來の神觀念や道教信仰を基盤に活動し、また祟りや凶兆を豫測してそれを避け、それに關する祓いや祭祀を行う。つまり陰陽師は古い師であり、息災や除病を祈願する特異な宗教家とし

て機能してきたことを述べる。また陰陽道は死後の展望、來生觀を持たない、現世に生きる人の願望を滿たす世俗的な宗教であったと位置づけている。

第三章「陰陽道信仰の諸相——中世初期の貴族官人・都市民・陰陽師——」。

下級官人の毎月・四季の泰山府君祭などの恒例祭祀を例に擧げており、陰陽道信仰が社會的に定着し、かつ陰陽道由來の信仰が民衆間に浸透することを中世的な展開としている。

第四章「密教修法と陰陽道」。

平安時代中後期、顯密の寺院と陰陽道は國家・貴族社會における宗教としての機能を果たしながら、密教行法の中に陰陽道の諸要素が濃厚に取り込まれて新たな修法が成立した。その基本的要因として、唐代後期の密教が道教の信仰要素を取り込み、両者が宗教的基盤を共有したことを擧げている。また陰陽道と密教の習合は、陰陽道が獨自の世界觀、來生觀を持っていなかったことをその要因のひとつとしている。

また陰陽道の神々の信仰は、大きくとらえるならば、
 顯密佛教のコスモロジーの枠中に位置づけられており、
 そこに兩者の融合を促進する基盤があったとしている。

第五章「院政期の大将軍信仰と大将軍堂」。

陰陽道との関連で、院政期に盛行する大将軍信仰について述べる。陰陽道はそもそも寺院や神社など特定の宗教施設を持たないが、大将軍堂は陰陽師の關與はなく、市井の宗教者、民衆によって信奉され成立した施設とされたことを擧げている。

第二章「安倍晴明と天文学家安倍氏」。

第一章「安倍晴明の邸宅とその傳領」。

安倍晴明の邸宅推定地を「左京北邊三坊二町(西半町)」とする。土御門家は豊臣秀吉の諱忌に觸れて都より追放されたが、江戸時代になり下京梅小路村に居を構えた。

しかし、この時代には土御門家の古來の陰陽道の占法、六壬占法が傳わらず、同時に晴明有縁の靈所、土御門家の舊地が忘れ去られた。これを近世と古代・中世陰陽道

の斷絶の象徴と位置づけている。

第二章「安倍晴明の「土御門の家」と晴明傳承」。

晴明一人が陰陽師のイメージとして收斂していった背景を考察している。平安時代末晴明の土御門の家を相續した泰親らは、晴明を顯彰してその舊地を靈所化することで、位階や官職の面で絶えず賀茂氏の風下に立たされたことから脱却しようとしたことを指摘する。そして安倍家の存續の危機を回避し、安定をはかる狙いがあったことを述べている。

第三章「天文道と天文学家安倍氏」。

日本古代・中世の天文に關わる認識の體系である天文道や陰陽道、宿曜道のうち、本章では中國天文学の説を繼受し天文觀測と天文占を擔い朝廷の施策にも影響を與えた天文道を考察している。

律令制においては陰陽寮に天文博士がおかれるが、天文道はやがて安倍氏の家業となる。天文知識や制度、技術などは中國のものが繼承された。また安倍氏などの天文学家によって觀測が行われたが、それが爲政者の關心と

あわせて多数の天文記録が残された。

こうして安倍氏には『三家簿讚』や彗星・氣象圖をもなう「雑卦法」などの(現在中國には残らない)重要な天文書や、それらの要項をまとめた『天文要抄』などが伝えられた。その一方で、安倍家では天文道の技能の精確性よりも、家業の存在を優先させていった。これを中世國家の支配體制に主要因があるとしている。

第三部 「陰陽道と文献史料」。

陰陽道の研究の大きな史料群である若杉家文書の公開により、陰陽家が用いた中國傳來の典籍や、彼らが残した著作、勅文、記録や文書などが徐々に明らかになっていったことを挙げる。

また中村璋八著『日本陰陽道書の研究』(汲古書院、一九八五年「増補版、二〇〇〇年」、村山修一編著『陰陽道基礎史料集成』(東京美術、一九八七年)、詫間直樹・高田義人編著『陰陽道關係史料』(汲古書院、二〇〇一年)などの先行研究を踏まえ、第三部では陰陽道史料の俯瞰的な検討がなされている。

特に本章の記載内容は、史料的価値が高いものとなっている。

第一章 「陰陽道關連史料の傳存狀況」。

一、陰陽寮のテキストと滋嶽川人の著作、二、日時・方角關係(『曆林』『陰陽略書』『陰陽雜書』『陰陽博士安倍孝重勸進記』『陰陽道舊記抄』『陰陽吉凶抄』『方角禁忌』『建天全書』『曆林問答集』『日法雜書』)、三、五行說・占術關係(『五行大義』『占事略決』『六甲占抄』)、四、祭祀關係(『反閑作法并作法』『反閑部類記』『小反閑作法并護身法』『文肝抄』『陰陽道祭用物帳』『祭文部類』『諸祭文故實抄』)、五、曆道關係(『大唐陰陽書』、『宣明曆』『符天曆日躔差立成』『注定附之事』)、六、天文道關係(『天文要錄』『天地瑞祥志』『石氏簿讚』『雜家法』『格子月進圖』『安倍泰親朝臣記』『天文書口傳』『天文要抄』『家祕要錄』『天變地妖記』)、七、日記・文書・系圖(『養和二年記』『承久三年具法曆』『永仁五年朔旦冬至記』『在盛朝臣記』『土御門家關係記錄』『土御門家文書』『醫陰系圖』)、八、賀茂・安倍兩氏が伝え、失った史料、を挙げる。

第二章『承久三年具注曆』の考察。

承久三年(一二二二)の具注曆に關して天理大學附屬天理圖書館所藏本、金毘羅宮所藏本、石川武美記念圖書館成實堂文庫所藏本、神田喜一郎氏所藏『明惠上人夢記』紙背曆を比較検討し、天理本が原本であることを證明し、この天理本の翻刻を掲載する。

第三章『大唐陰陽書』の考察——日本の傳本を中心として——。

『大唐陰陽書』はすでに中村璋八、大谷光男兩氏が検討をし、唐の陰陽家、呂才の『陰陽書』と推定されることを指摘する。またこれらは中國ではすでに散逸しているが、わが國には『大唐陰陽書』卷三十二、三十三卷のみではあるが、數種の寫本が傳わる。その理由について、これらの卷が曆注記載の原點としての利用價值が高かつたことなどを指摘する。さらに各寫本を比較検討、分析している。

第四章「宣明曆について——『高麗史』曆志と日本の傳本——」。

山下克明著『平安時代陰陽道史研究』

宣明曆は唐の穆宗の長慶二年(八二二)から昭宗の景福元年(八九二)にいたるまで七一年間行われた曆法である。日本では貞觀三年(八五九)に陰陽頭兼曆博士大春日眞野麻呂の申請により、翌年から江戸時代の貞享元年(一六八四)までの八二三年長期間運用された。一〇世紀から一四世紀の初頭まで、日本と朝鮮とともに宣明曆を使っていた。この二者の曆を比較検討し、さまざまな相違点を指摘している。

以上本書の内容を概観した。

陰陽道は、道教や中國の思想文化などの影響を受けながら日本独自の發展をした。今後陰陽道研究は國內外を問わず、隣接分野との多角的研究がよりいっそう活発に行なわれると思われる。その場合には、情報の共有化が必要となるが、本書はその基盤となる史料を提供する一書となるであろう。

そうした多角的な研究に關して先驅的に取り組む研究者のひとりとして、山下克明氏のよりいっそうの活躍に期待をしたいと思う。

山下克明著 『平安時代陰陽道史研究』

(A5判、四六〇頁、二〇一五年一月、
思文閣出版、八五〇〇圓(税別))

『東方宗教』バックナンバー 在庫一覽

6, 8・9 (合訂本), 10, 19, 20, 23, 24, 29, 32號	各800圓
63, 66, 67, 69, 71~82號	各1,200圓
86~88, 90號	各2,000圓
91~93號	各2,500圓
95~126號	各2,800圓

なお、82, 86, 90は在庫が1部のみとなっております。
購入のお問い合わせは下記へお願いいたします。

〒175-0082 東京都板橋区高島平1-10-2
東方書店業務センター
(擔當, 田村 正)
TEL 03-3937-0300
FAX 03-3937-0955
Email: sinaba@toho-shoten.co.jp